

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 22 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520544

研究課題名（和文）

日本の複数の多言語コミュニティを比較する言語習得・言語接触の調査研究

研究課題名（英文）Field Research Comparing Language Acquisition and Language Contact in Several Multilingual Communities

研究代表者

ロング ダニエル (Long, Daniel)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：21520544

研究成果の概要（和文）：

近い将来に日本が多民族、多言語社会になるのではないかとされています。それが現実になったときに、様々な政策作りや社会問題緩和のために参考になるのは、過去に実際に形成された日本国内の多言語コミュニティである。本研究では、数世代にわたる「長期的」コミュニティ（小笠原諸島の欧米系島民）を、半世紀続いている「中期的」もの（石垣の台湾系島民）、そして10年ほど続いている歴史の浅い「短期的」もの（茨城県大洗町のインドネシア人）と比較している。

研究成果の概要（英文）：

In this project we conducted field work on several multilingual communities in Japan in order compare aspects of language acquisition and language contact in them. These were the “long-term” community of the Westerners of the Ogasawara (Bonin) Islands who use English, the “mid-term” community of the Taiwanese of Ishigaki Island (Okinawa) who use the Min-nan dialect of Chinese, and the “short-term” community of the Indonesians in Ooarai-machi, Ibaraki Prefecture who use the Minahasa dialect. Because the third community was devastated by the Great Tohoku Tsunami of March 2011, we also conducted research on the “short-term” multilingual community of Iga-Ueno in Mie Prefecture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：言語習得・言語接触・日本語教育・文化受容・移民研究・自然習得・外国人と地域社会・コードスイッチング

1. 研究開始当初の背景

本研究、「日本の複数の多言語コミュニティ

を比較する言語習得・言語接触の調査研究

は次のことを目的とする。日本に存在する3

つの「外国系」住民コミュニティを比較することによって、日本語習得の長期的・中期的・短期的な特徴を明らかにした上で、この研究成果をこれからの日本語教育に活かせる提案、提言をまとめること。三つのコミュニティとは

- (1) 東京都小笠原諸島の欧米系島民コミュニティ、
- (2) 沖縄県石垣島の台湾系島民コミュニティ、
- (3) 茨城県大洗町のインドネシア人住民コミュニティ、

である。

これまで申請者は10年に渡り、小笠原諸島の欧米系島民コミュニティを対象に、

(ア) 彼らの日本語習得の過程、

(イ) 習得途中段階で起きた日本語と英語の「混合言語」現象、

(ウ) 彼らが習得した日本語の中間言語的特徴、

を研究してきた。彼らは江戸時代に小笠原に住み着いて、明治時代から日本語習得の長い道のりが始まった。(現在も彼らは英語を保持している点、日本語と英語を混合して使っている点、彼らの日本語には標準語と異なる中間言語的な特徴が多く残っている点を合わせて考えると、彼らの日本語習得過程はまだ途中段階にあることが認められる。) 今回の研究プロジェクトでは、これに二つの言語コミュニティを加えて、歴史的スパンの違いによる日本語習得の特徴を追究する。

(A) 日本語習得が長期的(一世紀以上)になっているコミュニティ(小笠原欧米系)

(B) 日本語習得が中期的(半世紀以上)になっているコミュニティ(石垣台湾人)

(C) 日本語習得が比較的短期的(10年)になっているコミュニティ(大洗町インドネシア人)

## 2. 研究の目的

日本で暮らす3つの多言語コミュニティにおいて、日本語がどのように習得されてきたのか?特に日本語の自然習得の過程に注目した。日本語以外の言語を母語とする個人が日本語を習得する場合と違って、今回の研究対象となっているのはいずれも同一の母語を持つ人のコミュニティであった。こうした「外国系」コミュニティの中で生活することによって、日本語習得がどのように発展するか(化石化が起きやすいか、中間言語がコミュニティ言語として定着するか、ピジン・クレオール・混合言語といった接触言語変種が生じるか)を明らかにすることを目的にした。

日本で二つ以上の言語がコミュニティ内で使われることの短所(子供が二つの言語を混合するから変は目で見られる)や長所

(例:子供たちはバリンガルだから就職するさいに有利)を検討した上で、それぞれのコミュニティに対する具体的な提案、提言を行なうことが目的であった。さらに、これまで小笠原でもやってきたように、録音調査で収集されたデータのうち、オーラルヒストリー的な観点などコミュニティにとって価値の高い保存資料をまとめて、コミュニティに提供することも目的であった。

## 3. 研究の方法

この研究は主に現地調査に行なわれたものであった。日本の複数の多言語コミュニティにおける言語習得状況を比較し、日本語の学びやすい要素と学びにくい要素、あるいは変化しやすい要素と変化に耐える要素を見つけ出そうとした。2009年度は小笠原欧米系島民および大洗町インドネシア人住民の調査を行なった。さらに、沖縄や奄美の若年層が話す地域共通語である「ウチナーヤマトゥグチ」や「トン普通語」を、標準語教育ではなく、第2言語として日本語習得の視点から捉え直した。研究論文や図書、研究発表や招待講演などを通じてその研究成果を公表し、フィードバックを求めた。

2010年度は小笠原欧米系島民および石垣の調査を行なった。さらに、沖縄や奄美の若年層が話す地域共通語である「ウチナーヤマトゥグチ」や「トン普通語」を、標準語教育ではなく、第2言語として日本語習得の視点から捉え直した。研究論文や図書、研究発表や招待講演などを通じてその研究成果を公表し、関連分野の研究者の反応を求めた。

なお、当初フィールドの一つとして考えていた大洗町は2011年3月11日に起きた東日本大震災の被害を受けたため、調査が続けられなくなった。これまでお世話になっていた大洗のインドネシア人たちの安否が確認できたが、その後多くは(一時)帰国をしていた。一方、三重県伊賀市にある多言語コミュニティ(ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、中国語、韓国語、タガログ語、中国語)の方々に調査をしたいと申し入れしたら、それを快く受け入れてくれた。

## 4. 研究成果

複数の多言語コミュニティを比較した結果、次のことが分かった。(1)混合言語が生じるのは若いコミュニティではなく、むしろ数世代の時間を積み重ねた長期的なものであることが分かった。これは当初の予測や「一般常識」に反した驚きの発見だった。

(2)中期的なコミュニティの場合は混合言語というよりもむしろ二つの言語変種(閩南語と日本語)の使い分けが目立った。石垣台湾人一世の「中間言語」には、ほかの地域の

自然習得者との共通点も見られるが、「ウチナーヤマトゥグチ」という地域言語と、非母語話者の中間言語との両方の絡み合わせによる独特な「沖縄県ならではの」言語現象も見られる。(3) 短期的なコミュニティである大洗町では(10年住んでいる人が多いとは言え)、日本語がまだ習得段階にある大人はいるが、バイリンガルな2世も年月と共に増えつつある

Among our finding were the following.  
 (1) Contrary to popular belief it is not the newer communities in which Mixed Language phenomena are found, but rather older more established ones. (2) In the mid-term community we found, not Mixed Language, but rather differentiate usage. The Japanese used by first-generation Taiwanese migrants to Ishigaki showed features common to other naturally acquired varieties of Japanese, but its incorporation of linguistic characteristics from the contact variety “Uchinaa Yamatu Guchi” made their variety unique. (3) In the short-term community of Ooarai, adults still struggle with Japanese, but bilingualism is increasing among their children raised in Ibaraki. The Iga-Ueno community differs from the Ooarai community in that the non-native speakers in Mie must use Japanese as a Lingua Franca to community with foreigners who do not speak the same language.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17件)

- ① ロング・ダニエル、言語接触から見たウチナーヤマトゥグチの分類、人文学報、査読無、428、2010、1-30頁
- ② ロング・ダニエル、小笠原諸島の日本語変種、日本語学、査読無、29-14、2010、118-131
- ③ ロング・ダニエル、日本語習得者が作る日本語文法、日本語文法、査読有、10. 2、2010、39-58
- ④ ロング・ダニエル、張守祥、張愛慶、石坂真央、今村圭介、塚原佑紀、田中節子、石垣島の台湾系島民の日本語—1話者のケーススタディー—、日本語研究、査読有、30、2010、31-50
- ⑤ ロング・ダニエル、伊賀上野の外国人住民コミュニティの言語生活環境—参与観察調査からの中間報告—、人文学報、査読無、443、2011、1-19

- ⑥ ロング・ダニエル、世界の少数派言語の言語景観に見られるアイデンティティの主張、世界の言語景観 日本語の言語景観、査読無、2011、3-12
- ⑦ ロング・ダニエル、小笠原諸島に見られる旧南洋庁地域の言語的影響、言語文化研究、査読無、22. 4、2011、3-13
- ⑧ ロング・ダニエル、激動の20世紀を生きた小笠原諸島欧米系島民のオーラルヒストリー、小笠原研究、査読無、36、2011、21-49
- ⑨ Long, Daniel、Cultural Ecotourism and the Ogasawara (Bonin) Islands、小笠原研究、査読無、37、2011、85-96
- ⑩ 朝日祥之、ロング・ダニエル、ハワイのプランテーションで作られた接触方言：オーラルヒストリー資料に見られるコイナー日本語、日本語研究、査読有、31、2011、1-13
- ⑪ ロング・ダニエル、言語科学からみた小笠原ことばの意義、科学、査読無、81. 8、2011、796
- ⑫ ロング・ダニエル、小笠原ことばだって貴重な文化遺産、ニューズウィーク日本版、査読無、8. 10-17、2011、86
- ⑬ Chapman, David & Long, Daniel、English in my home: Citizenship, Language, and Identity in the Ogasawara Islands, Language and Citizenship in Japan (Routledge Studies in Sociolinguistics)、査読有、2011、175-192
- ⑭ Long, Daniel、Linguistic Exchange, colonial lag and a South Sea Island dialect of Japanese、Ogasawara Research、査読無、38、2012、17-29
- ⑮ ロング・ダニエル、緊急時における外国人住民のコミュニケーション問題—東日本大震災と阪神大震災から学べること—、日本保健科学学会誌、査読有、14. 4、2012、183-190
- ⑯ 中井精一、現代方言からみた植物利用の地域多様性、日本列島の三万五千年—人と自然の環境史、査読有、2011、173-198
- ⑰ 中井精一、フクロウの鳴き声から好天を予兆する、人と自然、査読無、2、2011、2-5

[学会発表] (計 21件)

- ① ロング・ダニエル、内側から見た日本語教育—日本語習得研究の20年間—、国際学術シンポジウム「東アジアにおける日本語教育の実践」(招待講演)、2009. 05. 22、ソウル中央大学校
- ② ロング・ダニエル、小笠原混合言語はどうして言語と呼べるか?、関西言語学会

- (招待講演)、2009.06.07、神戸松蔭女子学院大学
- ③ Long, Daniel、Language Change on the Micro-Community Level: Contact and Identity on the Ogasawara Islands、都市言語学セミナー(招待講演)、2009.06.18、香港
  - ④ Long, Daniel、Retention of Linguistic and Cultural Heritage Aspects by the Taiwanese Community of Ishigaki Island (Okinawa, Japan)、SICRI 5(第5回世界小島嶼文化研究会議、2009.06.26、佐渡島)
  - ⑤ ロング・ダニエル、小笠原の多文化社会、海洋開発シンポジウム(招待講演)、2009.06.29、横浜開港記念会館
  - ⑥ ロング・ダニエル、第二言語習得者の中間言語と地域方言との境目—沖縄石垣島の台湾系住民コミュニティの「カラ」を例に—、ICJLE(日本語教育国際研究大会)2009.07.10、シドニー
  - ⑦ ロング・ダニエル、日本語習得者が作った日本語文法、日本語文法学会(招待講演)、2009.10.24、東京
  - ⑧ ロング・ダニエル、琉球語使用地域にみられる中間言語、世界日本語教育大会、2010.07.31、台北(国立政治大学)
  - ⑨ Long, Daniel、Archiving the Japanese Language Oral History of the Northern Marianas, Open Symposium: The Japanese Colonial Past of the Northern Mariana Islands、2010.05.15、Saipan Visitors Center Theater
  - ⑩ ロング・ダニエル、言Long, Daniel、Cultural Ecotourism and the Ogasawara (Bonin) Islands、Ogasawara Research、査読無、37、2011、85-96
  - ⑪ 語景観と日本語教育、日中韓国際シンポジウム「越境した日本語研究」(招待講演)、2010.09.11、中国ハルビン師範大学東方言語文化日本研究センター
  - ⑫ ロング・ダニエル、日本各地に見られる多言語景観、日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム多言語化する地方、2011.01.08、富山大学
  - ⑬ ロング・ダニエル、ハワイのプランテーションで作られた接触方言—19世紀末生まれの日系人の録音資料に見られるコイナー日本語—、日本方言研究会、2010.10.22、愛知大学
  - ⑭ ロング・ダニエル、ヴァン・ブスカーク日記に見られる19世紀末の小笠原社会、第2小笠原研究者円卓会議、2010.11.21、横浜山手234番館
  - ⑮ 石坂真央、ロング・ダニエル、小笠原で英語と日本語が混ざるときに、第2小笠原研究者円卓会議、2010.11.21、横浜山

- 手234番館
- ⑯ Long, Daniel、"Insularity", Colonial Lag, and a South Sea Islands Dialect of Japanese、7th International Small Island Cultures Conference、2011.06.14、Airlie Beach, Queensland Australia
  - ⑰ Long, Daniel、Researching Non-Standard Dialect Usage in Linguascapes、Methods in Dialectology 14、2011.08.06、University of Western Ontario
  - ⑱ ロング・ダニエル、言語接触に見られる普遍性と個別性、日本英語学会、2011.11.13、新潟大学
  - ⑲ ロング・ダニエル、今村圭介、伊賀上野の外国人住民の言語事情—地方都市におけるリンガフランク日本語—、地域言語研究会、2012.01.08、大阪大学
  - ⑳ ロング・ダニエル、小笠原諸島の地域言語、日本言語文化研究会(招待講演)、2011.06.09、政策研究大学院大学
  - ㉑ ロング・ダニエル、緊急時における外国人住民のコミュニケーション問題、第21回日本保健科学学会学術集会(招待講演)、2011.10.15、首都大学東京荒川キャンパス

〔図書〕(計 4件)

- ① 真田信治、ロング・ダニエル、朝日祥之、簡月真共編、秋山書店、社会言語学図集、秋山書店、2010、全210頁
- ② 大橋理枝、ロング・ダニエル、放送大学教育振興会、日本語からたどる文化、2011、全234頁
- ③ 中井精一、ロング・ダニエル共編、桂書房、世界の言語景観—日本の言語景観—景色のなかのことは—、2011、全264頁
- ④ ロング・ダニエル、新井正人、明治書院、マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴—(海外の日本語シリーズ㉒)、2012、全171頁

〔その他〕

ホームページ等  
<http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/~long/linguascape/gengokeikan.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ロング・ダニエル (Long, Daniel)  
 首都大学東京・人文科学研究科・教授  
 研究者番号: 21520544

(2)研究分担者

中井 精一 (NAKAI Seiichi)

富山大学・人文学部、准教授

研究者番号：90303198

西郡 仁朗 (NISHIGORI Jiro)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：04686632

(3)連携研究者

( )

研究者番号：